

Web2.0時代の 図書館システム

国際基督教大学図書館

黒澤公人

時代の区切り目としてのWeb2.0

- Web 2.0 以前
 - 目録カードのデジタル化
 - すべての図書館が同じデータ
- Web 2.0 以後
 - 図書、雑誌自体のデジタル化
 - 日々拡大し続けるデータ
 - ブラウザだけあれば、あらゆることができる。
- いくつかの提案

Web2.0以前の図書館システム

- 1960 - 2005年の出来事
- カード目録をデジタル化する。
- OPAC = 図書館システム = 目録システム

1965 - 1969

図書館システムの黎明期

- IBM360の登場
- MARCの登場(1966)
- OCLC誕生(1967)

1970 - 1974

図書館システム、書誌ユーティリティの誕生期

- LC-MARCのMT配布
- UTLAS(1971)
- RLG(1974)
- LIBRIS(1969 スウェーデン)
- BLCMP(1969 英)
- SWALCAP(1969 英)
- Dialog(1972)
- 日本でのLC-MARCの印刷配布(ABC社)
- 国会図書館漢字コード制定(1970)

1975 - 1979

図書館員達による図書館システムへの挑戦の時代

- JIS漢字制定(1978)
- LC/MARC による実験システム
- DOBIS(1976)
- INNOPAC社設立(1978)
- Z39.50(1979)の研究開始

1980 - 1984

JP/MARC,LC/MARCシステムの登場

- JP/MARC配布開始(1981)
- Model204システム(筑波大学図書館 1981)
- 金沢工業大学カードレスシステム(1982)
- 日本でのUTLAS利用開始(1982)
- 学術情報センター(1984)
- 図書館パッケージ総覧(1985)

1985 - 1989

JP,LC対NACISIS,そして、CJKプロジェクト

- UTLAS、OCLCの日本での利用の拡大期
- 学術情報センターの利用の本格化
- CJKプロジェクト(1982)
- US/MARC(1983)
- UTLAS Japan/CATSS(1987)、台湾、韓国

1990 - 1994

ダウンサイジング、Internetの普及

- 図書館システムメーカーの登場
- NACSIS準拠システムの拡大
- Internet Telnet によるOPACの登場
- Telnet OPAC一覧(1994 農林水産省 林氏)

1995 - 1999

Web-OPACの登場

- Windows95、IEの登場(1995)
- ブラウザーの普及
- Web-OPACの登場
- UTLASの衰退
- NACSISの標準化(JP/LC->NACSIS変換へ)

2000 - 2005 多言語システムの登場

- 国情に改組(多言語システムへの切り替え)
- 多言語システムの登場
- 早稲田 INNOPACシステム導入(1999)
- MARC21(1997)の登場

2006 -

Web2.0時代の図書館システム

- OCLC、RLGの統合
- 雑誌全文記事データと超巨大システムの登場
(ProQuest, JSTOR, Science Direct)
- 新たな図書データの出現と超巨大システムの登場
(Amazon, Google, オンライン書店など)

新たな図書データ

- 図書の紹介データ
- レビュー
- 目次
- 表紙画像、全頁イメージデータ
- 図書の全文情報
- キーワード分析、リンク情報、参照分析
- 図書の購入状況

日々増大する付加価値

- リストマニア
- レビュー
- 購入動向
- 検索動向
- アフリエイト (世界中の人を営業マンにしてしまう。)
- 全文テキスト分析 (関連図書の次々と見つける)

図書の全文フルテキストの現状

- 1時間に3000ページを読み取るマシンの登場
- 図書を破損することがない。
- OCR化の進化
- 世界中の図書館から図書が運び出されスキャンされている。

たとえば、

スタンフォード大学には、毎日トラックがやってくる。
カリフォルニア大学とGoogleの契約によれば、
1日3000冊を運び出し、250万冊をスキャンする。

全文検索ができるとは

- 文章の中で使われている言葉で検索できる。
- 文章からキーワードを抽出できる。
それらのキーワードを比較すると関係の
高い図書を見つけ出すことができる。
参考文献とリンクが可能
この本を参照している図書を探し出すことが
可能。

Googleの展開

- 著作権問題をどうする。
- 「検索しかできないもの」と「すべての内容が読めるもの」
- シェイクスピアなどの古い本はみんなのもの。
- ダウンロード可能。
- 日本語の全文フルテキスト検索もやります。

Web2.0 時代の図書館システム

- 図書・雑誌の内容をダイレクトに検索する。
- 1000万冊の電子図書館の出現。
- 図書同士の関連が明確にわかる。
- 図書の出版状況から思想、歴史が分析できる。
- これから出版する図書を検索できる。
- これから出版してほしい図書を希望することができる。

書店や図書館はようになる

- アマゾンが国会図書館を凌ぐ。
- あらゆる資料をアマゾンから入手する。
- 個人、古書店、出版社を巻き込んだ巨大ネットワークができる。
- 絶版になった図書をデジタル復元する。
(各出版社が在庫を抱える必要がない。)
- 図書の出版は、かぎりなく増加する。
(少量多種類、出版が非常に簡単になった。)

図書館はどうなる

- 地域、コミュニティに必要な情報を積極的に収集する。
- 蓄積ではなく、動的なコレクションづくりを行う。
- 利用者に動向にあわせた、コレクションの動的関係付けを行う。
- 利用者からの書き込み情報が大切

提案その1 (国会図書館の復権)

- 国会図書館の図書・雑誌のデジタルスキャン
- 当面 雑誌のイメージだけでも
- 図書とデジタルデータの納本
- 日本語OCR化(明治から現代までの対応)

提案その2 (一つのシステムで)

■ Web2.0的小学校図書館システム

小学校で個々の図書館システムを持たない。
小学校向け図書10万冊のデータベースを
全国で一つの図書館システムとしてみんな
で使う。

図書の発注、廃棄管理。

全国から読書感想文を登録する。

作家の方とのコミュニケーション。

1台のパソコンとバーコードラベルがあれば、
その日から運用可能。

提案その3 (図書館のために)

- 図書館から複写機をなくす。
- その替わり、スキャンロボットを設置する。
図書を破損することがない。
トナー、紙代がいらぬ。コピー代金が不要に
紙やトナーを使わぬので、環境にも優しい。

ただし、現行機種は高価
著作権ビジネスの登場

提案その4 (個人のために)

- 個人のための10万冊の電子図書館
- 個人が読んだ図書、雑誌、新聞記事をすべて記録するシステム
- 記憶を記録する。
- 図書の現物保管には、高コストがかかるので、電子図書館システムに登録して、現物は廃棄する。